

文化，経済，社会の中での教育と研究

Towards Creating a Unique Education System in Japan

須田達也



筆者は、日本で博士号を取得後渡米、それから30年近く、教育・研究を通じて、日米の政府、企業、大学と深いかわりを持ってきた。筆者の「国際交流」経験に基づき、日米の教育・研究に対する考え方の違い及び日本における教育・研究のあり方について思うことを述べる。アメリカの教育・研究に対する考え方の根幹は、“文化、経済、社会の中での教育・研究”という考えである。この考え方は、その多様な文化、経済、社会に深く根差したものであり、アメリカの教育・研究の制度は、その考え方を反映したものになっている。日本の教育・研究は、日本の文化、経済、社会に深く根差したものでなければならず、単なる他国の制度の模倣であってはならない。自己の果たすべき役割の確立、多様性及び個の尊重、公平な競争と多様な評価・報酬など、いろいろアメリカに考えさせられる点が多いと思うが、単なる表面的な制度の模倣・改革に終わるのでなく、日本の文化、経済、社会に深く根差した日本独自の教育・研究を作っていってほしい。

キーワード：文化、経済、社会の中での教育・研究、自己の果たすべき役割の確立、多様性と個の尊重、公平な競争と多様な評価・報酬

1. まずは、自己紹介

まずは、自己紹介から。アメリカに住み始めて30年近くになる。京大で博士号を習得後に渡米した。初めは、コロンビア大学でポストドクトリアル研究者として2年間研究に従事し、その後現在のカリフォルニア大学に移って25年。最初にアメリカに来たときには、1年の予定だったのにな…と思いつつ、もう30年近くたってしまった。その間、日米の大学に招教され、教鞭をとったことも何度かある。また、アメリカの政府機関であるNSF（全米科学財団）にてプログラムディレクターを数年兼務したり、日本の政府系の機関（IPAやNICT）でプログラムディレクターやアドバイザーをさせてもらったりもした。日本の企業（NTT、NTTドコモ、KDDI、日立、NEC、富士通など）やアメリカの企業とも、共同研究を通じてかなり深い付き合いをさせてもらっている。このように、教育・研究を通じ、日米の政府、企

業、大学と深いかわりを持ってきた。世界各国からの教育者・研究者・学生と接する機会も数多く持った。アメリカをベースにした30年近い「国際交流」を通じ、幾つか思うことがある。

一つは、これまで教育者・研究者としてやってこれたのは、いろいろな人に助けてもらったお陰だ、ということ。例えば、一緒に研究を行ってきた学生・ポストドクトリアル研究者のメンバー、発表した論文を読んでもらった研究者の方々、発表論文の印刷にかかわった方々、その郵送にかかわった方々、論文の学会発表のための旅行の手配にかかわった方々、学生のサポートに必要な研究費を提供してくれた政府・企業の方々、研究費を得るための研究提案書を審査してくれた方々、その事務手続きをしてくれた方々、経費の処理をして頂いた方々、私を教育してくれた恩師の皆様、学生や私自身またいろいろ手助けして頂いた方の両親・家族の方々… 助けてもらった人のリストは無限に続く。きっと、世界中の人に感謝しないと駄目なのだろう。（こう思うのはオジンになった証拠なのだろうか。）日本から進出していったアメリカに住み着いた数少ない（最近はそうでもないかもしれないが）教育者・研究者ということで、特に日本の

須田達也 正員 カリフォルニア大学アーバイン校情報工学科
E-mail suda@ics.uci.edu

Tatsuya SUDA, Member (Information and Computer Science, University of California, Irvine, Irvine, California, 92697-3425 U.S.A.).
電子情報通信学会誌 Vol.92 No.5 pp.332-335 2009年5月